世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

# 三十六歌仙絵における和歌：業兼本が目指したもの



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者: 武蔵野大学文学部日本文学研究所<br>公開日: 2023-09-21<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 寺島, 恒世<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000017 |

# 三十六歌仙絵における和歌
## ―業兼本が目指したもの―

寺島　恒世

### はじめに

歌仙絵研究を先導された森暢氏は、三十六歌仙絵の性格と歴史につき、次のように総括されていた。

歌仙絵の面白さは歌道の発展につれて生れた流行の上にあり、それなるが故にさまざまな歌仙絵が生れ、絵と書と歌との調和の上に独自の世界を開いている。三十六歌仙絵がその後の各時代に描かれ、狩野土佐を問わず、あらゆる流派の作家たちによって描かれていることも、歌を背景にするとはいえ、絵と書と歌の世界に深い興味をいだいたからであり、歌仙絵には国民絵画ともいうべき性格と歴史とが示されているのである。

（『歌合絵の研究　歌仙絵』角川書店、一九七〇年）

「絵と書と歌との調和」を具体的に解き明かすことは、三十六歌仙絵にとどまらず、また巻子本・冊子本・画帖等、書物の形態を問わず、絵とともに歌が書き記される秀歌撰の研究に必須となる課題に違いない。ただし、角度の異なるアプローチは複数の専門に関わり、説得的な解明を行うのは容易ではなく、理想に向けた実践は必ずしも進展してはこなかった。ようやく近年、三十六歌仙絵における絵と歌の相関をめぐる考察がなされ始めてきたところである。[1]

先に稿者は、佐竹本とともに業兼本・俊忠本等の三十六歌仙絵や扁額歌仙絵を取り上げて、主として書の面から絵と歌との関係をめぐる課題につき、いささかの検討を試みた。特に、「時代不同歌合絵[2]」との先後関係の認定で説が分かれる業兼本につき、他本に増して歌合形式の左右対比への関心を強く有する本作が、書式でも「時代不同歌合絵」を意識し、その性格を受け継ぐと認めうることを論じた。[3]その選歌においても『時代不同歌合』との一致が少なくないことを踏まえ、以下のような判断を下した。

（業兼本の）歌合への志向は、単に形を整えるためでは

なく、二首を番えて味わう興趣を求めた編纂の動機に由来していたように思われる。

例えば、上下巻の各冒頭に置かれた人麿と貫之の歌は、

たつたがはもみぢばながる神なびの
　御室のやまに時雨ふるらし　　人丸

むすぶてのしづくににごる山の井の
　あかでも人にわかれぬるかな　　貫之

という、ともに『時代不同歌合』を典拠とする歌で、水のイメージを共有しつつ、内容は自然と人事に対比される二首である。これを番いとして併せ読めば、「時雨」「しづく」「山の井」等から涙が連想され、以て貫之歌が詠む別れの悲哀は増幅し、人麿歌の「もみぢば」からはその涙の紅色も暗示されて、重ねる味読が情感を深める仕組みとなっている。（中略）それは、踏まえた『時代不同歌合』が二首の番いに腐心した編集をなすことを受けたものと思しく、業兼本の編集は、佐竹本とは大きく異なり、組み合わせの妙を重視していた。『時代不同歌合』を踏まえつつ、独自に二首を番えようとする意識が、書式の左右の対称性を強めるための大きな要因となっていたのである。

その後、土屋貴裕氏により、「時代不同歌合絵」が詳しく検討され、その価値とともに三十六歌仙絵に先行すると解すべきことが詳述された[4]。かくして業兼本の研究は〈絵〉を中心に解明が着実に進み、〈書〉についても一通りその性格を辿りうるのに対し、〈歌〉に関しては、なお検討すべき課題を残している。右の拙考も、『時代不同歌合』と重なる歌を中心とした考察で、全歌の徹した分析に基づいておらず、選歌に際して参照された可能性を持つ資料との関係の解明もなお不十分である[5]。

本稿では、業兼本の和歌につき、選歌とともに番いをなす二首の実態を明らかにし、以て三十六歌仙絵としての本作の性格を見極めてみたい。

## 一　業兼本の選歌

「国民絵画」と称すべき豊饒な展開を見せる歌仙絵作品は、所収歌もきわめて多様である。それらのうち、森暢氏が三十六歌仙絵の佐竹本以下九種の伝本、及び扁額歌仙絵の白山神社本以下七種の伝本の和歌につき、その全貌を比較され（先掲書）、佐藤恒雄氏が香川県に伝来する扁額歌仙絵の八伝本の和歌を紹介され、森氏紹介の七本を含めた全体を対象に検討をなされている[6]。

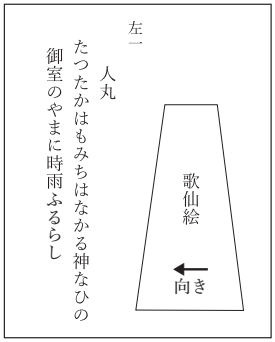
これら和歌一首を扱う一首歌仙本の諸本につき、その形態を検討された新藤協三氏は、「厖大な数の組合せ」が想定される諸種のうち、所収の全歌を等しくする伝本が複数存在するものを対象として、六つの形態に分類できることを導かれた[7]。

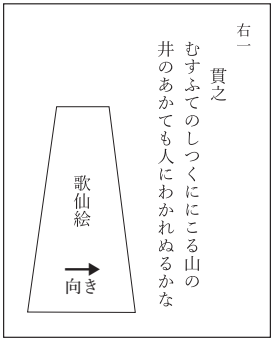
諸氏の先行研究を踏まえ、業兼本の歌の採用とそれが意味するものを考えてみよう。

## ア　業兼本の本文

業兼本は、諸所に断簡が伝わるものの完本は伝存せず、研究は東京国立博物館所蔵住吉家伝来の模本により進められてきた。

その書式は前半の左方歌人は絵に続いて歌人名と歌が二行書きで示され、後半の右方歌人は歌人名と歌の次に絵が描かれており、各歌人の肩に左右と番数が注記される。前後半の各冒頭を図示すれば次の通りであり、人麿の絵は巻軸方向を向き、貫之は巻頭方向を向く姿で描かれて、その絵と歌が記される書式とにより、相互に相手方と向き合う対称の形をなすのである。




相向き合う歌人たちの歌は以下の通りである。

左一　人丸　たつたかはもみちはなかる神なひの御室のやまに時雨ふるらし
左二　躬恒　すみよしのまつを秋かせふくからにこゑうちそふるおきつしらなみ
左三　家持卿　かさゝきのわたせるはしにおくしものしろきをみれは夜そふけにける
左四　業平朝臣　月やあらぬ春やむかしの春ならぬわかみひとつはもとのみにして
左五　素性　いまこむといひしはかりになかつきのありあけの月をまちいてつるかな
左六　猿丸大夫　おくやまにもみちふみわけなくしかのこゑきくときそ秋はかなしき
左七　兼輔卿　人のをやのこゝろはやみにあらねともこをゝもふみちにまよひぬるかな
左八　敦忠卿　今日そへにくれさらめやはとおもへともたえぬは人のこゝろなりけり
左九　公忠朝臣　よろつよも猶こそあかねきみかためいのるこゝろのかきりなけれは
左十　斎宮女御　ことのねにみねのまつかせかよふらしいつれのをよりしらへそめけむ

左十一　敏行朝臣　すみのえのきしによるなみよるさへや夢のかよひち人めよくらむ

左十二　宗于朝臣　ときはなるまつのみとりも春くれはいまひとしほのいろまさりけり

左十三　清正　ねのひしにしめつるのへのひめこまつひかてやちよのかけをまたまし

左十四　興風　うらちかくふりくる雪はしらなみのすゑのまつ山こすかとそみる

左十五　是則　かけさへにいまはときくのうつろふはなみのそこにもしもやおくらん

左十六　小大君　たなはたにかしつとおもひしあふことをそのよなきなのたちにけるかな

左十七　能宣朝臣　ちとせまてかきれる松も今日よりはきみにひかれてよろつよやへむ

左十八　兼盛　しのふれといろにてにけりわかこひを物やおもふと人のとふまて

右一　貫之　むすふてのしつくにこる山の井のあかても人にわかれぬるかな

右三　赤人　わかのうらにしほみちくれはかたをなみあしへをさしてたつなきわたる

右二　伊勢　おもひ川たえすなかるゝ水のあはのうたかた人にあはてきえめや

右四　遍昭　すゑの露もとのしつくやよの中のをくれさきたつためしなるらむ

右五　友則　秋かせにはつかりのねそきこゆなるたかたまつさをかけてきつらむ

右六　小町　はなのいろはうつりにけりないたつらにわかみよにふるなかめせしまに

右八　高光　かくはかりへかたくみゆるよのなかにうらやましくもすめる月かな

右九　忠峯　ありあけのつれなくみえしわかれよりあかつきはかりうき物はなし

右十　頼基　ひとふしにちよをこめたるたけなれはつくともつきし君かよはひは

右十一　重之　なつかりのたまえのあしをふみしたきむれゐるとりのたつそらそなき

右十二　信明朝臣　あたらよの月とはなとをゝなしくはあはれしれらむ人にみせはや

右十三　順　みつのおもにてるつきなみをかそふれはこよひそ秋のもなかなりける

右十四　元輔　あきの、のはきのにしきをわかやとにしかのねなからうつしてしかな

右十五　元真　あさみとりみたれてなひくあをやきのいとをは春のかせやよるらん

右十六　仲文　ありあけの月のひかりをまつほとにわかよのいたくふけにけるかな

右十七　忠見　ねのひするのへにこまつのなかりせはちよのためしになにをひかまし

右十八　中務　いそのかみふるきみやこをきてみれはむかしかさししはなさきにけり

## イ　選歌の資料

一巻本形式の模本の本文は、右方の二人目と三人目（赤人と伊勢）が、注記から分かる通り、逆に位置し、また七番右にあるべき朝忠を絵とともに欠いて、全三十五首である。これらにつき、「佐竹本三十六歌仙絵」、藤原公任撰『三十六人撰』、藤原俊成撰とされてきた『三十六人歌合』、「広本三十六人歌合」、及び『時代不同歌合』所収歌と対比してみよう。

藤原公任が撰んだ『三十六人撰』は、周知の通り『三十六人歌合』とも称される三十六歌仙作品の源流となる秀歌撰で、冒頭の人麿・貫之、躬恒・伊勢と末尾の兼盛・中務の三組六名が各十首、その他の歌人が各三首採用され、総計は一五〇首である。これに対し、近衛尚通により藤原俊成の撰と認定された『三十六人歌合』は、すべての歌人各三首、計一〇八首からなり、公任本のほぼ三分の二が新歌に差し替えられている。「広本三十六人歌合」とは、その公任本の歌と俊成本で差し替えられた新歌を併せた形のもので、伝本により小異を有するが、二〇〇首を超える規模の集成本である。『時代不同歌合』は既述の通り、後鳥羽院撰の三〇〇首である。

なお、元来二巻構成の歌合としての性格を有することから、次表の掲出は番いごとに左右を並べる形とし、引用する和歌本文・作者名の表記は私意に改める（以下同じ）。

| 番 | 歌人 | 和歌（初句） | 佐 | 公 | 広 | 俊 | 時 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 左　人麿 | 竜田川 | × | × | ○ | ○ | ○ |
| 〃 | 右　貫之 | むすぶ手の | × | × | ○ | ○ | ○ |
| 2 | 左　躬恒 | 住吉の | × | × | ○ | ○ | ○ |
| 〃 | 右　伊勢 | 思ひ川 | × | × | ○ | ○ | ○ |
| 3 | 左　家持 | かささぎの | × | × | ○ | ○ | ○ |
| 〃 | 右　赤人 | 和歌の浦に | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 4 | 左　業平 | 月やあらぬ | × | × | ○ | ○ | ○ |
| 〃 | 右　遍昭 | 末の露 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 5 | 左　素性 | 今来むと | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 〃 | 右　友則 | 秋風に | × | × | ○ | ○ | ○ |
| 6 | 左　猿丸 | 奥山に | × | × | ○ | ○ | ○ |
| 〃 | 右　小町 | 花の色は | × | × | ○ | ○ | ○ |
| 7 | 左　兼輔 | 人の親の | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 右 | 朝忠 | 欠 | | | | | |
| 8 | 左　敦忠 | 今日そへに | × | ○ | ○ | × | × |
| 右 | 高光 | かくばかり | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 9 | 左　公忠 | 万世も | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 右 | 忠岑 | 有明の | × | × | ○ | ○ | ○ |
| 10 | 左　斎宮 | 琴の音に | ○ | ○ | ○ | × | × |
| 右 | 頼基 | 一節に | × | × | ○ | ○ | ○ |
| 11 | 左　敏行 | 住の江の | × | × | ○ | ○ | ○ |
| 右 | 重之 | 夏刈りの | × | × | ○ | ○ | ○ |
| 12 | 左　宗于 | 常磐なる | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 右 | 信明 | あたら夜の | × | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 13 | 左　清正 | 子の日しに | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 右 | 順 | 水の面に | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 14 | 左　興風 | 浦近く | × | × | ○ | ○ | ○ |
| 右 | 元輔 | 秋の野の | ○ | ○ | ○ | × | × |
| 15 | 左　是則 | かげさへに | × | × | × | × | × |
| 右 | 元真 | あさ緑 | × | × | × | × | × |
| 16 | 左　小大君 | 七夕に | × | × | × | × | × |
| 右 | 仲文 | 有明の | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 17 | 左　能宣 | 千歳まで | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 右 | 忠見 | 子の日する | × | × | ○ | ○ | ○ |
| 18 | 左　兼盛 | 忍ぶれど | × | × | ○ | ○ | × |
| 右 | 中務 | いそのかみ | × | ○ | ○ | × | ○ |

〔佐＝佐竹本、公＝公任本、広＝広本、俊＝俊成本、時＝時代不同歌合〕

### ウ　業兼本と先行秀歌撰の関係

右のデータからまず気付かされるのは、業兼本の和歌の佐竹本所収歌との差異である。不明の朝忠を除く全三五例のうち、一致するのは○印を付す一二例に過ぎず、全歌の三分の二は異なることが知られる。佐竹本の歌は、三六首すべてが次段の公任本収載歌と一致して、公任本を典拠とすると認められるのに対し、業兼本の歌は、表示の通り、×印の歌が一三例と三分の一以上が公任本とは一致せず、公任本に依って選歌したものではないことが導かれる。また、その次の段の「広本三十六人歌合」の歌とも×印の四首が異なっており、新藤氏が分類された六形態の諸本はすべて広本の和歌を収載するのに比して、業兼本の独自性が確認される。

その公任本に由来しないことを典型的に示す冒頭部分に注目すれば、人麿から家持に至る五歌人の歌は、いずれも俊成本と一致している（既述の通り「広本三十六人歌合」は公任本と俊成本の合成ゆえ、この一致は俊成本に基づく）。

すなわち、この資料の関わり方からすれば、業兼本は公任本ではなく俊成本を念頭において選歌したもの、と言えそうである。

ただし、俊成本はその成立過程が定かではなく、最下段に示す『時代不同歌合』との関係が問題となってきた。俊成本は既述の通り、公任本と異なって、一歌人各三首の総計一〇八首の作であり、その三六歌人のうち二四名が『時代不同歌合』と重なる。その同一歌人二四名の歌、全七二首は、ほぼすべての七〇首が両作に一致している。これは明らかな襲用であり、これまで『時代不同歌合』が俊成本から受け継いだものと見る説が行われる一方で、そもそも俊成本を俊成撰と見る確証はなく、存疑とする見方もなされてきた。この課題につき、田仲洋己氏は詳細な検討を施され、俊成本は俊成以降の成立であり、『時代不同歌合』の影響を受けて成立したものと論じられた。[8] 説得的なこの論証により、俊成本を俊成撰とは考えるのは困難となった。しかも、俊成本の成立時期は特定し難いために、その業兼本との先後関係も不明となり、以て業兼本と『時代不同歌合』との関係の有無あるいは度合いも確定されないことになったのである。本論冒頭に述べた課題の、選歌に際して参照された可能性を持つ資料との関係とは、これら資料の関わり方を指している。

### エ　業兼本と『時代不同歌合』

業兼本は俊成本と『時代不同歌合』のいずれと関わるのか、右のデータから推定されることを検討してみよう。

『時代不同歌合』に不採用の一二名（斜線を付す歌人）のうち、朝忠を除く一一名において、猿丸・高光・頼基・宗于・清正・仲文の半数以上に及ぶ六名の歌が俊成本と一致している。従って選歌は俊成本に依拠した結果と一見考えられそうである。し

かし、そのすべては公任本収載歌とも一致しているため、基づく対象を特定することはできない。しかも一致しない五名において、公忠・小大君・忠見の歌は公任本と一致し、興風・元真はいずれとも一致していない。もとより選歌とはすべて編者固有の思惑に基づくため、数量的な割合を根拠とすることはできないものの、この様相は俊成本が念頭に置かれていたとは考えにくいことを示している。少なくとも業兼本と俊成本の相関を窺わせる根拠は一切存しないことが確認される。

では、『時代不同歌合』との関係はどう捉えられるだろうか。『時代不同歌合』と同一の歌人二四名において、歌が一致するのは○印を付す一五名、別歌が採用されるのは残りの×印九名である。その一致する一五名のうちの九名（人麿・貫之・躬恒・伊勢・家持・業平・忠岑・重之・兼盛）は、公任本ほかの「三十六人歌合」には見出せない『時代不同歌合』固有の歌と一致している。すなわち、共通歌人の六割強の歌が一致し、その六割が他作にはない歌となっていることが確認される。これも厳密には論拠にはならないものの、独自歌が重なる度合いの高さを偶然の結果と見るのは不自然であり、これは業兼本の歌が『時代不同歌合』に基づいて選出された可能性が高いことを示すであろう。

その関係はしかし、佐竹本が公任本のすべてを踏襲し、俊成本が『時代不同歌合』との共通歌人の歌七十二首中、七十首をそのまま採用する、謂わば盲従型の採用であることとは性格を異にする。業兼本の各歌の選定はいかになされていたのか。ここに必要となるのは、冒頭で述べたように『時代不同歌合』に基づく二首が有している番いの構造が、『時代不同歌合』と一致しない歌を扱う番いにも認められるか否かの検証である。

## 二　番いをなす二首の関係

### ア　『時代不同歌合』不採用の歌人

そこで『時代不同歌合』不採用の歌人の歌が組まれている番いにつき、猿丸・敦忠・宗于・清正の例を取り上げ、二首の関わり方を検討してみよう。

猿丸が扱われる六番は、

奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の
　声聞く時ぞ秋はかなしき（左・猿丸）
花の色はうつりにけりないたづらに
　我が身世にふるながめせしまに（右・小町）

という組み合わせである。扱われるのは「秋」の「紅葉」（猿丸）と春の「花」（小町）であり、「かなしき」秋（猿丸）と「ながめ」する沈鬱な春（小町）の、愁いに満ちた主体の心情が詠まれる。比べ読めば、春秋の花紅葉の対比のもと、両季における主体の気分の暗さで通じ合う関係が認められる。さらに相関を見出すなら、右歌の「花の色」から左歌の紅葉の色が（紅であれ黄で

あれ）意識化され、左歌の妻問いに「鳴く鹿」の声が、右歌の「ながめ」に暗示される恋ゆえの物思いに発するという関わりが導かれるであろう。

敦忠が扱われる八番は、

今日そへに暮れざらめやはと思へども
たえぬは人の心なりけり（左・敦忠）
かくばかり経がたく見ゆる世の中に
羨ましくもすめる月かな（右・高光）

と、左が後朝の歌として日中の耐えがたさを詠むのに対し、右は『多武峯少将物語』で名高い高光の歌で、その出家時の感懐を詠む。恋歌・雑歌で異なる両歌は、中身を大きく異にする主体の心情が、耐え難い苦しみに直面していることで共通しており、長さの落差を越え、直面する今の時間を経にくいものと認識する切実さにおいて等しい。注目すべきは、両歌の成立事情の相違を超えて、経がたい時間の中に苦しむ「人の心」を扱うことで通い合う歌となっていることである。

宗于が扱われる十二番は、

常磐なる松の緑も春来れば
今ひとしほの色まさりけり（宗于）
あたら夜の月と花とを同じくは
あはれ知れらむ人に見せばや（信明）

と、左が春到来により常緑の松も色が深まると詠むのに対し、右は、春の月下の花の趣深さを詠む。その背景の、日中の明るさと夜の月明かりの対比のもと、二首は、常緑の映える松と儚く咲き誇る花という春の自然の美しさをともに讃える歌として番えられていると解される。

清正が扱われる十三番は、

子の日しに占めつる野辺の姫小松
ひかでや千代の陰を待たまし（清正）
水の面に照る月なみを数ふれば
今宵ぞ秋のもなかなりける（順）

と、左が野辺の小松引きの行事を扱い、引くことなく悠久の時間を待とうとする趣向で、永い時の流れを詠む狙いの歌であるのに対し、右も水面に煌めく月を、作者の創案になる「月波」という語彙を用い、月を数えて仲秋を知る時の流れ（月次）を表すことを狙いとする一首である。時間の進行を詠む二首は、初春の子日の小松引きと八月十五夜の月見という春秋の年中行事を扱うことにおいても共通しており、番いの構造を意識化していたと解してよいであろう。

紙幅の都合上すべてを示し得ないが、いずれの番いも、語彙・表現内容の種々の項目からそれぞれに共通し、対照される相関が読まれる仕組みとなっている。

### イ　業兼本固有の和歌

では、広本と一致せず本作固有の採用となる歌が扱われる番いはどうだろうか。

十四番、

浦近く降り来る雪は白波の
　末の松山越すかとぞ見る（左・興風）
秋の野の萩の錦をわが宿に
　鹿の音ながら移してしがな（右・元輔）

は、左の興風歌が公任本・俊成本はもとより他の秀歌撰にも見出し得ない独自歌である。海辺の雪を詠むために末の松山を用い、波に見立てた雪を詠むこの一首は、「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ」（古今集・東歌）を踏まえて、雪ならではの見立てに興ずる。対する元輔歌は、萩と鹿をともに自邸に移したいとする趣向の歌で、両歌に通う要素は、実現し得ない事象を取り上げ、王朝和歌らしい表現と趣向でまとめ上げていることに認められる。

十五番、

かげさへに今はと菊のうつろふは
　波の底にも霜や置くらん（左・是則）
あさ緑乱れてなびく青柳の
　糸をば春の風やよるらん（右・元真）

は、いずれも公任本はもとより他の秀歌撰に採用されない独自の選歌で、左が川面に映る菊花の移ろいの原因を推しはかり、右が乱れた柳枝を風がまとめるかと見る、ともに王朝歌らしい歌ながら、相関する要素を認めるのは容易ではない。ところが、実は右歌には錯誤があり、元真の真作は、

あさ緑乱れてなびく青柳の色にぞ春の風も見えける
（後拾遺集・春上）

という本文である。業兼本の下句は「あさ緑そめて乱れる青柳の糸をば春の風やよるらん」（是則集、新勅撰集・春上）という是則の歌と一致しており、この誤りは素材も表現もよく似た両首が混同されたことに発したものであろう。

真作によれば、左歌の水面に映る菊花の移ろいを水中の霜に帰せしめる把握と、右歌の柳の緑が揺れることで風の可視化が図られるという把握が、ともに斬新な趣向として共通する。右歌の真作の要所は風を可視化する〈色〉にあり、左の移ろう菊花と右の鮮やかな柳の、ともに賞美される対照をなす色が印象的な二首となる。

以上、『時代不同歌合』とは異なる歌を含む番いにおいても、二首がそれぞれ固有の関わり方ながら作意としての相関を読ま

せる仕組みとなっているのである。

こうした関係の認定は読み手の把握如何によるものであり、論証は蓋然性の範囲に留まるのに対し、最後に、和歌の解釈にはよらない別の角度から指摘される事例をみておきたい。

### ウ　典拠の一致

十七番は、

千歳まで限れる松も今日よりは
君にひかれて万世や経む（左・能宣）

子の日する野辺に小松のなかりせば
千代の例に何をひかまし（右・忠見）

という二首が選ばれている。能宣歌は佐竹本と同一歌で、佐竹本では忠見歌が「焼かずとも草はもえなむ春日野をただ春の日にまかせたらなむ」である。

その佐竹本においては、両歌の相関は早春の歌であること以上の要素は認めにくいのに対し、この業兼本の両首は「子の日」の歌として素材も表現もきわめて近く、一読して読者には明らかな連関性が了解される。

そもそもこの二首は『拾遺抄』・『拾遺集』の春部で並べられたものであり、『和漢朗詠集』（「子日付若菜」題）でも、『金玉集』でも隣り合って配置されている。いずれも忠見歌・能宣歌の順で配され、忠見の作者表記はすべて忠岑となっているが、『三十人撰』・『三十六人撰』（公任本）で忠見の歌であり、『忠見集』に朱雀院の催しでの作とある通り、忠見歌と認められる。忠見は『時代不同歌合』に採られない歌人で、この歌は右の勅撰集もしくは公任本を含む秀歌撰から選ぶ際に、明らかに典拠レベルに及ぶ二首の近さを意識していたことが推測されるのである。

## おわりに

歌仙絵作品に和歌が選ばれる時、何より優先される評価基準は、それが歌人にふさわしい秀歌であることだろう。文字通り〈秀歌撰〉であるために、その歌に対する編者の評価がすべてを決定する。かつて谷山茂氏が俊成本を論じられ、貫之歌・業平歌が公任本が採用しない「むすぶ手のしづくににごる山の井のあかでも人に別れぬるかな」・「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」を収めることに俊成ならでの評価を認められたように[9]、各歌人の歌らしい卓越が見定められたに違いない。

業兼本の選歌もその方針を貫いたはずで、各歌は各歌人を代表する歌であった。それを当然の前提として、業兼本の他の三十六歌仙とは大きく異なる特徴は、見てきた通り、歌合形式を強く意識せしめる左右相対の構造とすることへのこだわりにあった。それが絵と書とともに歌においても明瞭に窺われるの

であり、いずれもそれは『時代不同歌合』を踏まえていたことが導かれるのである。

その和歌が『時代不同歌合』と関わっている事実は、絵における影響とともに早くから指摘されてはいた。[10] ただし、従来は一致する和歌の指摘にとどまり、関係の検討などはなされていない。本稿で確認したいのは、その数量的な影響関係の実態ではなく、選歌の際に番いをなす二首の相関が意識されていたこと、それが『時代不同歌合』の選歌の原理を受け継ぐものであったと認められることである。

業兼本は、可能な限り『時代不同歌合』の歌を継承しつつ、そのすべてを踏襲してはいない。かつて論じたように、『時代不同歌合』は歌仙歌合たる秀歌撰として、各番二首の歌の選出に、「〈対比〉と〈相補〉の原理によって新たな意味を生ましめる、番えることならではの方法」を用いていた。[11] 業兼本が安易に『時代不同歌合』の和歌に依拠することなく、別歌をも敢えて採用していたのは、そうした『時代不同歌合』を貫く原理に基づき、興趣に富む番いの構成を企図した結果と見てよいであろう。

絵や書とともに歌の選定にも確かに左右相関の原理が働くことにより、業兼本固有の性格が備わったのである。それは、業兼本が後代の歌仙絵作品に果たす役割の大きさと深く関わっているように思われる。

**注**

(1) 井並林太郎『特別展 佐竹本三十六歌仙絵と王朝の美 図録』(京都国立博物館、二〇一九年)、笹川博司『三十六人歌仙の世界―公任『三十六人撰』解読―』(風間書房、二〇二〇年)等。

(2) 『時代不同歌合』は後鳥羽院が隠岐において編んだ一〇〇歌人を歌合形式に仕立てた秀歌撰であり、一歌人三首、総計三〇〇首からなる。「時代不同歌合絵」はその和歌本文に歌仙絵を伴うもので、鎌倉時代に遡る善本以下多くの伝本が知られる。

(3) 拙稿「歌仙絵における文字表記―〈左右〉の意識と左書きの来歴―」(『日本文学』六三-七、二〇一四年七月)

(4) 土屋貴裕「三十六歌仙絵の成立と「時代不同歌合絵」」(『大和文華』一三五、二〇一九年八月)

(5) 業兼本の和歌の先行資料との関わりを解明すべき課題は、早く有吉保氏により示されていた。(「選歌からみた三十六歌仙絵攷―業兼本は再吟味が必要か―」『新修日本絵巻物全集／月報二三』一九七九年三月)

(6) 佐藤恒雄『古代中世詩歌論考』(笠間書院、二〇一三年)

(7) 新藤協三『三十六歌仙叢考』(新典社、二〇〇四年)

(8) 田仲洋己『中世前期の歌書と歌人』(和泉書院、二〇〇八年)

(9) 谷山茂著作集二『藤原俊成―人と作品―』(角川書店、一九八二年)

(10) 「時代不同歌合絵」と業兼本の先後関係につき、森暢氏が業兼本先行とされる(先掲書)のに対し、真保亨氏は絵に見る相関から「時代不同歌合絵」先行とされ、併せて和歌の影響も指摘されている。(「業兼本三十六歌仙絵」『美術研究』三二五、一九八三年九月)

(11) 拙著『後鳥羽院和歌論』(笠間書院、二〇一五年)

〔付記〕
本稿は、JSPS科研費16K02393の成果の一部である。